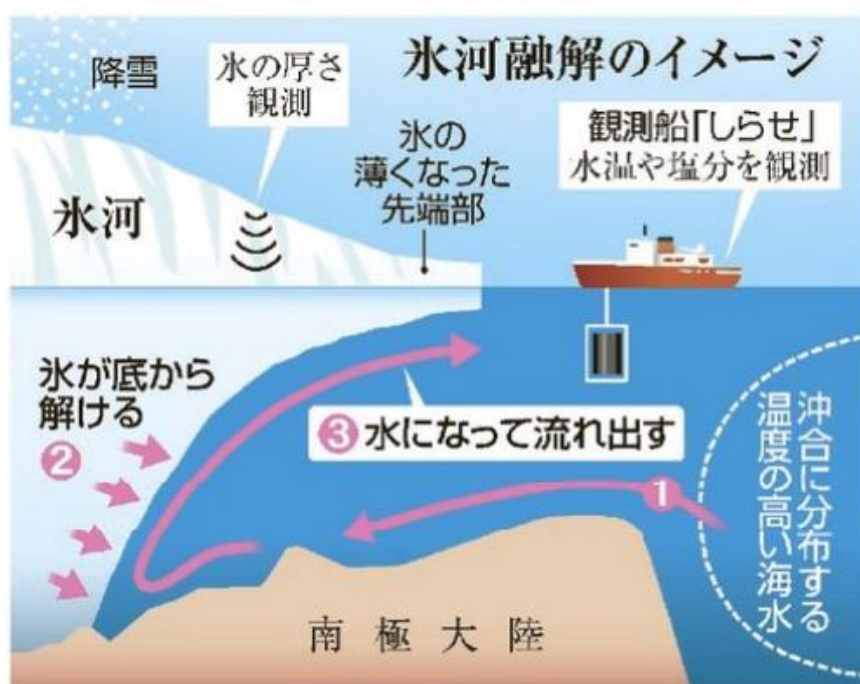


南極の水河が、底の方に流れ込む温度の高い海水であったため、水になっていく仕組みを突き止めたこと、北海道大などの研究チームが26日までに、科学誌「ネイチャー・コミュニケーションズ」電子版で発表した。南極・昭和基地近くにある白瀬水河での観測データを用いた。

チームによると、南極には地球上の水の約9割があり、全てが水になると海面が約60センチ以上上がる。平野大輔北海道大助教は「大量の真水が海水に流れ込むと、海の循環にも影響が出て、気候変動にもつながる」としている。水河は海に近い先端ほど次第に薄くなり、一部は海に浮いている。この部分の水が薄

氷河、水になる仕組み解明

南極・昭和基地そばで観測



くなると、氷河をせき止める力が弱まって海に流れやすくなる。白瀬水河付近の海は厚い氷に閉ざされるなどしており観測が難しかったが、チームは

下には潜り込むように流れ込んで、氷河は底の方から水になっていることが分かった。こうした現象は、南極の夏に当たる12〜1月で目立って起きていた。

南極観測船「しらせ」を用いて2017年1〜2月に周辺の31点で水温や塩分などを観測することに成功。また、氷河の先端部分に機器を設置して氷の厚さなどを調べた。その結果、0度程度と比較的